

エコー

大沢  
響

エコー

大沢  
響

登場人物

5

一 ある男の日常

6

二 リリィーという少女

14

三 続・リリィーという少女

24

四 紅

39

五 シナプスの幻

51

六 崩壊

57

七 あるシテイの日常

66

# エコー

大沢  
響

## 登場人物

ギルト……………アロン・ニューテクノロジーの社長。  
ジーナ……………ギルトの妻。  
シャロット……………ギルトの会社が開発した総合管理AI。  
リリー……………紅い髪の少女。  
ジャステイン……………ギルトの幼馴染。

## 一 ある男の日常

ハイ・ウェイの空気は冷たく、そしてこの上なく清潔だ。男はバルコニーから、どこまでも続く平行線のような道を眺めていた。空が白み始める時間帯だった。男はいつも夜明け前に起きて、この光景を眺める。この街と共に変化してきた風景だ、だが男はその長い変化の変遷は知らなかった。半世紀ほどの時間を要した都市計画の全貌を体感するには、男は若すぎた。彼はただ、その道と、その先に見えるビル群れの美しさを気に入っていた。

6時7分。警報音が小さく鳴った。窓を開けすぎていたのだろう、空調が作動する音がした。男はため息をつく、部屋に入った。彼の背後で窓がゆっくりとスライドし、音も無く閉まった。男は服を着替えた。流行りのライト・グリーン/Yシャツに、派手すぎないチェッカー柄のジャケットを羽織る。清潔感のあるダーク・ブルーのメッシュが五本入った黒髪を、クリスタル・スプレーでさっと固めた。

6時12分。男はタブレットを取り出し、今朝のニュースを一通り読んだ。

6時15分。温かいカフェオレがカップに注がれた。男はそれを一口啜った。

6時30分。男はタブレットを鞆にしまうと、立ち上がった。さあ、仕事だ。

「本日は、今やAI部門で世界1位の業績を誇る大企業、アロン・ニューテクノロジー株式会社の若社長のギルト様にお会いできました。噂の敏腕若社長はルックスも爽やかですね？」

今朝一番の仕事は特集番組のインタビューだった。応接室でカメラを向けられたギルトは、ため息をつきたくなる気持ちを抑えながら、作り笑顔で返事をした。

「ありがとうございます。」この笑顔も爽やかです！「異様にハイ・テンションなりポーターに、ギルトの眉が引きつった。リポーターは出されたコーヒーには手もつけず、ひたすら話し続けた。

「では本題に移りましょう、みなさんご存知、ここアロン・ニューテクノロジーは、超高度人工知能を世界で始めて開発し、販売した会社なのです！超高度人工知能とは、ざっくり言ってしまえば感情を理解する人工知能、ということでしょうか？」

「ええ、大まかにはそれで合っています。あとは、主に言語を用いて人間とやりとりし、サポートするので、感覚質の共有—ある言葉の意味を相手と共有するために必要なことです—や、同じ単語でも文脈によって異なる意味を読み取る、といったことが必要

になってきます」

記者はうなずいた。「有名な『言語問題』ですね。一時は不可能とまで言われていたこの問題は、四年前ドクター・ハガが解決し、ノーベル物理学賞を受賞しました。その超高度人工知能を応用した商品を初めて開発したのが、ギルト社長なのです。」

ギルトは苦笑した。「私ではありませんよ、うちの研究員達です。」

「ご謙遜を。」記者も笑った。和やかな雰囲気を訪れた。笑いが落ち着くと、記者は話を再開した。

「—そんな超高度人工知能の技術を用いて、シミュレーション・ゲームから秘書AIまで幅広い商品開発で世界に貢献しているアロン・ニューテクノロジーですが、本日は取って置きの新商品を見せて頂けるそうですね！ギルトさん、新商品とは一体どんなものなのでしょう？」

ギルトは初めて、本心からの笑みを浮かべた。「残念ながら、家庭用ではありませんよ」

ギルトは何も無い空間に向かって話しかけた。「シャロット、お客様に挨拶を。」すると、女性の声が聞こえてきた。

「始めて、ドット模様のネクタイが素敵なりポーターさん」

リポーターは驚いて何も言えなかった。ウォール・スपीカーから出たその声は、オフィスに相応しい堅さがあり、ほどよくセクシーだった。10人が聞いたらうち9人は

褒めるであろう、一切のクセのない声。

「驚きました」記者は言った。最先端のAIは、ここまで自然な声が出せるのですね。」

「ええ」ギルトの笑みが小さくなった。「万人に普遍的に気に入って頂けるよう、工夫しました。でも実を言うと、まだ不満があるのです。これはまだ、試作の段階です」ギルトはもう笑っていなかった。

「これで試作ですか？」記者は首をひねる動作をした。「私のような素人には、もう完璧だと思えるのですが…。」

「私のもっと、人間味のある声が欲しいのです。生身の人間がそこにいるような、一音一音に意味のある声が。」ギルトは本気で悩んでいるようだった。

リポーターは話題を変えた。「ところでギルトさん、これは秘書AI、ですか？」

「いえ。オフィス・ビルの、総合管理AIです」ギルトは穏やかに答えた。

「従来の秘書AIの仕事に加え、室温管理から防犯まで、ビル全体のスケールで所有者をサポートします。価格は未定ですが、2億くらいになるかと思われます」

「ビル全体ですか。斬新な発想ですね」リポーターは相槌を打った。

「斬新ではありませんよ。建物をトータル・マネジメントする機械という発想は、21世紀初期からありました。強いて言うならば、それを超高度人工知能技術と結び付けたところが、シャロットのユニークネスでしょうね」ギルトはコーヒーを一口飲ん

だ。リポーターははっとした。

「その、シャロットというのは新商品の名前ですか？」

「ええ。これまではずっと女神や聖人だったので、今回は物語から採りました。塔の中にいて外に出られないのですが、鏡を通じて世界の全てを見ているという姫の名前です。このAI自体は我々に触れることは出来ないけれど、ビルの全てを把握している、という点で彼女と大変似ていると思ひまして。」

「シャロット、いいですね。異国情緒があって、素敵な響きです」リポーターはしみじみと頷いた。

シャロットがギルトだけに聞こえるように囁いた。「社長、そろそろお時間ですよ」

ギルトはリポーターに頭を下げた。「失礼ですが、話の続きは次回にしてもらってもよろしいでしょうか？会議がありますので。」

リポーターはこちらも、頭を下げた。「いえ、大変貴重なお話をありがとうございます。ごさいました。」

彼は手帳を取り出した。「では次回は17日の16時からでよろしいでしょうか？」

ギルトは頷いた。「ええ、お待ちしております」

では、ともう一度軽く頭を下げ、ギルトは記者と共に応接室を出た。彼はそのまま、廊下を歩いて行った。

残された記者の頭上で声が響いた。

「お客様用出入り口までご案内いたしますわ。」

記者は指示に従い、会社を出て行った。

1日が過ぎるのは早い。ギルトは仕事を終え、家路についた。

帰ると、妻が出迎えてくれた。ゆったりとしたピンク・ゴールドの部屋着に、ワイン・レッドのスカートを履き、長い髪を白いバレッタで留めていた。赤いピアスは春のチェリー・ブロッサムのようなだった。気の強そうな切れ長の瞳、高い鼻、左目の下にある泣きボクロ、彼女の整った顔の全てのパーツの中でも、ギルトは特に唇を一番気に入っていた。彼女の唇は露に濡れた薔薇の花びらで、その味はまるでケーキを彩る甘酸っぱいベリーだった。

ギルトはタイを緩め、テーブルについた。

「あなた、今度の週末は暇かしら？」夕食を食べながら妻が尋ねた。紅の爪がコップの持ち手に絡んで、優雅にそれを持ち上げた。彼女は紅が好きだった。

「久しぶりに、食事に行かない？私は今週は空いているから」最近、妻は自分から誘うことが多くなった。

しかしギルトはあいにく、最近忙しくなったところだった。「すまないが、今週末は忙しいんだ。新しいAIの商品化に向けて、最後の調整が必要だね」

「それって、『シャロット』？」妻の言葉が微かに鋭くなった。

ギルトは苦笑した。「おおい、あれはAIだぞ。そう厳しくなるなよ。」

「でもあのAI、とても綺麗な声をしているわ」

「そりゃあ、万人に好かれるよう、声は厳選したからね」

「私は好きじゃないけど。」ジーナは視線を落とした。

「ジーナ」ギルトは妻の名を呼んだ。「何を心配しているんだ？私があれば特別な思いを抱く訳がないさ。あれは人工知能なんだから。」

ジーナは明らかにむっとしたようだった。「そんなことを言っているんじゃないわよ。」彼女はギルトの存在を忘れようとするかのように、食べることに集中し始めた。

ジーナは本心を口に出さない女だ。嫉妬、不安、あらゆる負の感情から、常にクリーンな自分であろうとする。そんな彼女が最も機嫌を悪くするのは、己が仕舞い込もうとしている感情を他人に悟られた時であった。気高い真紅の薔薇は、己に棘があることを認めようとししないのだ。しかしギルトは、彼女が本当は力強い真紅ではなく、手折られてしまいそうに心細い白薔薇であることも知っていたし、彼女には隠しきれない棘があることと、その棘を差し引いても十二分に清く美しい花卉を持つことも知っていた。だ

から彼はいつでも、こわごとと棘を覆い隠そうとして丸くなる花びらを、少し強引に、指でつまんで開かせてきた。今回も例外ではなかった。ギルトは彼女を抱きしめ、囁いた。

「例え人間相手だとしても、君に適う人はいないよ」

嫉妬をする君も可愛いよ。

棘も含めて君は美しいよ。

ジーナの花は、漸くほころんでくれた。

「どうかしら？」

「100パーセント保証するよ。」

2人でクスクスと笑った。

## 二 リリィーという少女

ギルトとシャロットの関係は、決して恋愛ではなかった。友情でもない。強いて言うなら、それはギルトの一方的な愛着、ひいき、特別視だった。しかし、ギルトは己に誓って言うが、ジーナへの想いはこれとは全く異質のものである。例えるならばシャロットは趣味、使い慣れた文房具、見るたびに得意な気持ちになる流行最先端のセルフォンであった。当然のことだが、彼にとって「彼女」はモノだった。

しかし、だからこそ、彼は「彼女」に対して、最も気兼ねなく接することができた。シャロットが自分を嫌うことはない。気分のみらもなければ、喧嘩になることも、裏切ることも絶対ないのだ。悪意のある第三者がそう仕向けたとしても、シャロットには自ら進化するウイルス遮断プログラムが組み込まれている。恐らくシャロットは、ゼロワン・シティの人工知能の中で最も安全だ。そしてそんな「彼女」は、手に入れた情報の全てを、所有者であるギルトの利益のために使う。そこに駆け引きも保身も存在しない。それを実感した時、ギルトはシャロットにシナプス・レゾナンス・システムを導入することを決めた。思考透視の一種で、32ケタのパスワードと塩基配列の一部を用い

た暗号によって、特定の個人と特定の人工知能が思考の一部を共有するシステムだ。これで、いつでもどこでも口を動かさず、シャロット以外に聞かれたくない情報について話すことが出来る。ギルトはこのシナプス・レゾナンスを切った直後の陶酔感が好きだった。頭の隅にはまだシャロットが住み着いていて、どこまでが自分でどこからが彼女なのか分からない感覚だった。

また、シャロットは思いを口にすることはあったが、ギルトの意思を限りなく尊重した。それは、ギルトが「彼女」に何でも話せる理由のひとつでもあった。何を話した所で、シャロットが倫理やモラルを持ち出して彼を説教することはない。ただ、冷静に、超高度人工知能で分析した最良のアドバイスをするだけだ。そんな「彼女」の態度はギルトにとって、とても心地良いものだった。

彼がシャロットに関して唯一不満な点は、声だけだった。あの、完璧すぎる声。とても綺麗だ、しかしまるで本物より綺麗なイミテーションだ。試行錯誤の末にここに辿り着いたことは分かっていたが、ギルトはどうしても不満がぬぐえなかった。彼の中の、数少ない、理性で制御できない感情が、これは違うと暴れていた。不幸なことに彼は、シャロットの声を聞いた10人の中で、彼女の声を気に入らなかった1人の方に属する人間だった。



ギルトには一風変わった趣味があった。休日には、わざとグレードを落とした服を着て街を出歩き、安い飲み屋や料理屋に入るのだ。目的は料理ではなかった。彼はそこで、見知らぬ人間と話すというスタイルの情報収集を好んでいた。人々の本音はネットワーク・テレビにも、電子新聞にも載っていないことを彼は知っていたのだ。ただ本音を聞き出すだけならシャロットを使えばいいのだが、そうしない理由は、単純にそれが楽しいからだ。投票にもいかない、マイクを向けられても是とも非ともとれないことしか言わない人々も、安い店で昼から飲んだ相手には、実に簡単に、己の不満や望みを明かした。それらは時にはラディカルで、時にはアグレッシブだった。

その日も、ギルトは身なりを落として昼食に出かけた。髪はいかにも手入れが行き届いてなさそうな、安っぽいオレンジのメッシュが3本。ジャケットの下のコラージュのTシャツでは、アナーキストの青年が折れた自由の女神の上で叫んでいる。中流階級にぴったりの青いミニ・バンでダウン・タウンをドライブし、寂れたカフェ・ラウンジに入ると、店内は程よく空いていた。ターゲットはカウンター席でミラノ・サンドを食べている男。ギルトは片手を上げて歩み寄った。「よう。隣、いいかい？」男は無言で頷いた。

ギルトは元來、人を見下す性質の人間であった。彼は己を、愚かではないが冷たい人

種だと評していた。しかし、その氷の心は、人が触れただけでは冷たさを感じさせず、むしろ温かくさえあった。他人の手をよく知っているこの氷にとって、優しいぬるま湯に化けることなど、造作もないことだった。しかし、どれほど人肌に心地良くなるうとも、彼の氷が解けることはなかった。彼は他のすべての人間を、同じ生き物として見ていなかった。貧しい人々にも温かいシャワーのように注がれる視線は、その誰一人にも焦点が合っていないかった。彼はその向こうにあるものを見ていた。彼が気さくな笑みを浮かべて隣に座った、まさに目の前にいる男でさえ、彼の氷った湖の瞳には映っていないかった。湖に映るのは、ただの、低所得者層の1人の本音という情報であった。

ギルトは最初、当たり障りなく景気について話し始めた。相手に拒絶する様子が見られなかったので、続けて、でっちあげた自分の事情を話す。そこで男に話を振ると、彼は狙い通りに話し始めた。

「俺ア、テクノロジ―障害でさ。このご時勢だ、機械が使えないやつ、電波が苦手なやつには、ろくな仕事がありやしねえ。」

男はブラック・コーヒーをすすった。「俺が今、何をしてるか知っているか？ AIの下っ端だよ。人工知能に出来る仕事をよ、もう1台買う金がないからって、俺達人間にやるせるのさ。」男は軽くむせて、水を飲んだ。「今時のAIは大したもんだ、人間みたいに命令しやがる。」

世間について、仕事について、家庭について。ギルトはそれを、満足げに聴いていた。しかし、後ろから聞こえた声に、ギルトの意識は全て持ってかれてしまった。

「オレンジ・マフィン下さい」

衝撃だった。

ギルトは後ろを振り向いた。4つほど離れた席に、少女が座っていた。服装は流行遅れの白いダッフル・コート。紅のショート・ヘアはあちこちに跳ねて、紅葉が頭から生えているようだった。

少女が、もう一度口を開いた。「あとホットのカフェオレも。」

ギルトは感嘆のため息をついた。

それは、ギルトが今まで、聴いたことのない声だった。AIの声を作るために、飽きるほど聞いたどの歌手、どの声優の声よりも、見事だった。綺麗、ではない。決して、万人に好かれるニュートラルな声ではない。しかし、言葉にできない魅力があった。彼女の声は、確かに、声帯を震わせ、喉を通して口から発せられていた。確かな呼吸が、血脈が、ギルトが長年AIに求めてきた人間らしさそのものが、そこにはあった。

手に入れたい、とギルトは思った。声を録音したいという意味ではなかった。ギルト

にも、兼ねてからのラディカルな望みがあった。人間の肉声に限りなく迫ろうと思ったら、録音だけでは足りない。肺から空気を送り、声帯が震え、口から息を発するシステムを、完璧に真似なければならぬのだ。そのためには元となる人間の呼吸器と声帯を切り取る必要があった。昔、どこかの博士が自らの子供を用いて行った、悪魔の所業と言われた実験。ギルトはそれを、どうしても試してみたかった。有名人や歌手ではだめだった。世間から消えても誰も気づかないような一般人が望ましい。その意味でも、この少女は理想的だった。

ギルトはシナプス・レゾナンスをオンにして、シャロットに己の思考を伝えた。

片耳だけささったイヤフォンから、彼女の声が響いた。「でしたら、話は簡単です」

「その少女を拉致しましょう。」

それでは危険だ、とギルトは却下した。ゼロワン・シティはTEMSZシステムに管理されており、その中でも防犯を司るASMは嚴重だった。公共の場で恐怖などの感情が一定以上の強さで発生すると、たちまちに察知され、防犯システムが作動するのだ。強い思考透視を用いて恐怖を抱く前に意識を奪う方法もあったが、公共の場でのレベル2以上の思考透視も法で禁じられ、こちらも破ればたちまちに察知された。TEMSZ自体は愚鈍なシステムだとギルトは考えていたが、ASMは侮れなかった。

「でしたら」とシャロットは言った。「まずギルト様への感情をプラス70以上にし、

向こうから接触するよう仕向けるのがよろしいかと」

分かった。恩を売るから状況を作ってくれ。口に出さずにそう言うと、ギルトはシナプス・レゾナンスを切った。脳が自分ひとりのものになり、急に思考がクリアになった。次の瞬間にはもう、彼の脳は方法論を求めて回転し始めていた。

ふう、お腹いっぱい。ごちそう様でした。リリィーは手を拭いて席を立った。会計を払おうとし、ゼロワン・カードをレジに通す。しかし画面に表示されたのは、真っ赤なERRORの文字だった。

あれ？おかしいな。彼女は首を傾げ、もう1度通すが、やはり画面には赤いサインがチカチカと点滅していた。3回目。リリィーが支払いに失敗すると、警報音が鳴り響き、奥から店員が出てきた。

それから先は、あつという間だった。カードを偽物だと疑われ、警察に連れて行くと怒鳴られ、現金の持ち合わせのないリリィーは謝り続けるしかなかった。絶体絶命と思われた時、聞きなれた会計完了の機械音がした。彼女がレジを見ると、そこには緑のTHANK YOUのサイン。顔を上げると、綺麗な顔をした若い男の人が笑いかけてくれた。リリィーは何が起きたのかを理解し、慌てて深々と頭を下げた。

「あの、本当にありがとうございました」  
店を出てからも、リリィーは何度も頭を下げた。男の人は困ったような顔で彼女をなだめた。

青い車の前まで来た。彼の車なのだろう、男の人が送っていかうか？とってくれるので、リリィーは慌てて断った。「大丈夫です、家近いです」これ以上迷惑をかけるわけにはいかなかった。

すると男の人は頭を掻いて、「そりゃあ、見ず知らずのおじさんの車に乗るわけがないか」と笑った。

そんなつもりはなかったのだが、上手く言葉が見つからず、結局リリィーは何も言えなかった。男の人はそのまま、車に乗り込んでしまった。リリィーは彼の気さくな雰囲気が好きになりかけていたのだが、何と話しかけたらいいか分からなかった。すると、運転席の窓が半分開いた。「そうだ。僕はギルトっていうんだけど、君はなんて名前なんだい？」

リリィーは嬉しくなって、笑顔で答えた。「リリィーです。」

「リリィーか。いい名前だ」ギルトは笑った。

「それじゃあ、また、どこかで会えたら」

ギルトの車が去っていった。青い車が角を曲がって見えなくなるまで、リリーはその場に佇んで見送った。

「どうだった」大通りに出るとすぐに、ギルトは尋ねた。

「リリーさんのギルト様への感情はプラス25以下。ファースト・コンタクトとしては、かなり成功しましたわ」携帯プレイヤーが答えた。ギルトは頷いた。

「レジに侵入したのか？」

「ええ。一時的にエラーを起こさせました。カード情報も一部は読み取れましたわ。リリー・パシオン。15歳。女性。後は画像登録データのみですが」

「十分だ。それとあの店に徒歩で来られる行動範囲、それに世帯平均年収中の中以下で絞り込んで、住所を割り出せないか？」

「TEMSZに侵入するのが最短かつ正確な方法ですが、よろしいでしょうか。」

ギルトは手を口元に当て、一瞬思索した。「構わない。証拠は残すなよ。」

「かしこまりましたわ」音声はそこでブツリと途切れた。

リリーの住所はすぐに見つかった。ギルトはシャロットを再びTEMSZに侵入させて、リリーの自宅を中心に半径5キロメートル以内の防犯カメラをスキミングさ

せた。そうして彼女の生活を追った結果、自宅から半径2キロメートル以内に彼女がいつも使うスーパー・マーケットと、たまに行く料理屋やカフェが何件かあること、父親と二人暮らしで、父親の仕事は末端のAIエンジニアであること、彼女が週に最低1回はサブ・ウェイに乗って古本屋に働きに行くことなどが分かった。ギルトはシャロットにあることを命じて、後はひたすら待った。少し日を置いて、ギルトは2度目の接触を計るつもりだった。

その間に、色々なことが起こった。「オフィス・ビル総合管理AI：シャロット」の商品化事業は少しばかり停滞し、予定に少々の遅れをとった。1週間が過ぎ、リポーターとの約束の17日が近づいたが、ギルトは次回のインタビューを延期した。リリーの声を手に入れるまでは、彼にはシャロットを世に出す気はなかった。

### 三 続・リリィという少女

リリィは月曜日と木曜日は、アルバイトだった。サブ・ウェイでダウン・タウン方面へ4駅下り、ボーンブリッツ駅から歩いて12分の立地にある小さな古本屋が、リリィの職場だった。紙媒体の本は市場からほぼ姿を消し、一般的にはギフト用にオーダーメイドで作られる贅沢品という印象を持たれるようになった。しかし、旧時代の紙媒体の本を普通に読みたいという人間もいることにはいた。そうした人々はこういった古本屋で、電子本の3倍以上、しかし新刊オーダーメイドの20倍以下の値段で本を買うのだ。リリィの働く古本屋も、そうした旧時代を懐かしむ人々のための、旧時代の忘れ物のような店だった。

その日もリリィは、出勤すると本棚を整理し始めた。この行為も、本来ならばデスク上で、人工知能非搭載の旧型パーソナル・コンピュータでさえ、ひとりですべてしてくれるような操作である。しかし、現実で人間がやるとひどく効率が悪い。本はずっしりと重く、様々な言語で書かれていて作者名の読み方が分からないものもある。出しては仕

舞いを繰り返し、上げっぱなしだった腕は気がつけば筋肉痛を抱えている。AIとの共同作業から漏れた人間には、実質的に機械以下の仕事しか残されていなかった。しばらくしてセルフォンが鳴った。リリィは店長の許可を得て電話に出た。

「お仕事申失礼いたします。エルド・パシオンさんの娘さんですよね？」

受話器から聞こえてきた声は、無機質な秘書AIのものであった。話を聞いてリリィは言葉を失った。

「エルドさんが大変なミスを犯し、弊社に甚大な損害を与えました」

「よって彼を解雇処分とし、損害賠償を求めます」

「つきましては、3月20日までに、賠償金支払を請求いたします。詳細は後程、封書でご自宅の方にお送りいたします。」

話の内容はつまり、こうだった。父がメンテナンスしたAIに異常が発生し、リンクしていたAI9機が全て故障、修復不可能な状態になった。壊れたAI計10機は、父の会社の全AIのおよそ20パーセントにわたる。これらが完全復帰するまでは、会社は主力商品であるソフト・ウェアの管理に甚大な影響を受けるといふ。父は当然ながら解雇されるらしい。賠償金額は見たこともないような桁数だった。

リリィは呆然として、受話器を置いた。店長が電話の内容を尋ねてきたが、言えなかった。リリィは深呼吸をした。心を入れ替えようと努め、なんとか笑顔を作った。



今は勤務中なのだからと、自分に言い聞かせて。

営業時間が始まり、ちらほらと客が入りだした。リリィーは今の自分の接客に自信がなかったの、なるべく奥のスペースに行こうとした。右奥の隅の美術関連書のスペースなら、人はあまり来ないはずだった。しかしそこには、すでに先客がいた。

その若者は、ダーク・ブルーのメッシュの入った髪をきちんと固めて、とても綺麗に整った高そうなスーツを着ていた。裕福そうな人だった。この古本屋には色々な客が来る。中にはオーダーメイド新刊を買う余裕があるのに、旧時代の「本物」にこだわるというマニアもいた。もっと昔の、それこそ博物館にあってもおかしくないような活版印刷や写本の本を集めている人もいた。けれど、ここまでお金持ちそうな人は初めてだ。それでいて、彼の格好はとてもスマートで、少しも嫌らしさを感じさせなかった。リリィーは思わず、まじまじと彼を見る。本を探している様子の男の人は、一瞬こちらの方の本棚を見た。横顔が目に入って、リリィーは驚きの声を上げそうになった。その男の人は、服装も髪型も全然違うけれど、紛れもなくあの、人だった。

会ったのは2週間ほど前、たった一度。話した時間は5分もない。しかし彼のしてくれた親切とかけてくれた言葉は、リリィーの記憶に未だ鮮明だった。リリィーの周りには、ちょうど一回りほど年上の男性というものがいなかった。長年人工知能だけを相

手にしてきた、崩れた体型の父と2人暮らし。親戚とも縁遠い。年の離れた兄はいたものの、リリィーが幼稚園に上がる前に亡くなってしまった。そんな人生を送ってきたリリィーにとって、ギルトはまさに未知の存在、全く新しい人間だった。接したいけれど接し方が分からない、はつらつで聡明な少女になろうとするけれど、愚図で無口な自分ばかり見せてしまう、壮絶なジレンマを感じる存在だった。その彼が目の前にいるという事実、リリィーは戸惑っていた。声をかけるべきか、やめるべきか迷っていると、ギルトの方がリリィーに話しかけてきた。

「すみません、この本はどこにありますか？」一瞬、互いの視線が交差した。彼の差し出したメモを見て、慌てて本を探し始めるリリィー。その姿を見ながら、ギルトは顎に手を当てていた。本を見つけて振り向いたリリィーの顔をもう1度見ると、彼は確信のありそうな声で言った。

「もしかして…リリィーかい？」

「はい、そうです！」リリィーはびっくりして、そして大きく頷いた。思い出してもらえたことが堪らなく嬉しくて、自然と笑顔になった。

ギルトも笑顔を浮かべた。「やっぱり君だったのか。また会えて嬉しいよ」彼は差し出された本を受け取った。「ありがとう。他の古本屋では見つからなかったんだ。」

「お役に立てて嬉しいです。」リリィーは小さく頭を下げた。

会話が途切れた。リリィーは何か言わなければと思いつきながら、またしても言えない自分を実感しなければならなかった。ギルトが髪を撫でつけた。その仕草にもリリィーは目を奪われた。このダーク・ブルーのメッシュは、とてもクールだとリリィーは思った。同時に、初めて会った時の、わざと崩したようなオレンジの髪を思い出した。リリィーは迷った。この人は、一体誰なのだろう。本当はどこでどういう仕事をしているのだろうか。聞いてみたいけれど、聞いてはいけない気がする。

沈黙が訪れて数秒が経つと、リリィーの心は徐々に己の内に沈んでいった。思い出されるのは、先程の電話。無機質なAIの声が、耳に絡みついて消えなかった。父が職を失い、賠償金まで負わされて、どうやって生きていけばいいのだろうか。ずぶり、ずぶり、底なし沼のような不安と恐怖に、足を捕られ、沈んでいく。

「どうしたんだい？何だか元気がないな。」リリィーは顔を上げた。ギルトが心配そうな顔でこちらを見ていた。

「僕で良ければ、話を聞く位のことでは出来る。全くの部外者でも良かったらだけど」

彼の言葉に、リリィーの理性の砦が決壊した。不安と恐怖の底なし沼は溢れ出し、大波のように盛り上がりつつリリィーを飲み込んだ。リリィーは気づいたらしゃくり上げて泣いていた。

泣きながら、彼女は全てのことを話した。ギルトは一言も口を挟まずに聞いてくれ

た。話していると、だんだん、波が退いていくのが分かった。今まで彼女には、弱音を吐ける相手がいなかった。問題が起きた時は、全て自分の力で解決するか、父に協力してもらって自分で解決するかしかなかった。背中をさする手の温度を感じながら、兄が生きていたらこんな風なのだろうか、リリィーは1人心安らぐ気持ちだった。

リリィーが落ち着くと、ギルトは静かに言った。

「その問題なら、どうにか出来るかもしれない。」

「あなたは一体誰なんですか？」リリィーは思わずギルトに尋ねた。

ギルトは答えなかった。彼は真っ直ぐにリリィーを見た。「本を見つけてくれたお礼だ。君のお父さんの会社を、教えてもらえるかい？」

翌日。父が勤める会社に、10機の最新型AIと、損害賠償と称された多額の金額が贈られた。受け取り条件はたった1つ、今回の件におけるエルド・パシオンの責任を不問にするというものだった。

リリィーと父は互いに顔を見合わせ、奇跡のような出来事にただ茫然としていた。リリィーが送り主について尋ねると、父の上司は全く分らないと答えた。

3日後の朝、リリィーが紙媒体の新聞をめくると、人工知能についての連載が目に入っ

た。そして彼女は、その中で紹介された会社、アロン・ニューテクノロジーの社長の名前が、ギルト・ロイウェルであることを知った。

「シチュエーションが過激すぎたでしょうか」シャロットが言った。  
「いや、あれくらい派手な方がいい。大事なのはギャップとインパクトだ」ギルトは上機嫌だった。

「リリーさんのギルトさんへの感情はプラス90以下。出会って2度目とは思えない数値ですわ。彼女が5日以内にギルト様のご職業に気づく可能性は75パーセント以下です。もう気付いていても不思議はありません」

ギルトは満足気に両手の指を組んだ。夕方の社長室には、彼一人だった。

ギルトはリリーに全く同情していなかった。そもそも、AIの故障は彼がシャロットに命じて引き起こさせたものだった。彼は同時に、彼女を助ける為に大金を支払ったことも、全く気にしていなかった。彼はそのどちらの出来事も、楽しんでいった。ギルトにとって、リリーはただの声だった。ギルトの氷の心は、外界の熱に決して溶けることはない。動機は全て、自分の中にある。そのためなら、他人を絶望の内に叩き落すことも、また、逆にそれを希望の光でもって救い上げることも、彼には容易く出来た。金

はいくらでもあった。目的を達成するために、そしてそのプロセスで趣向を凝らすために、ギルトは惜しげも無く金を使った。

「成功する可能性は？」

「75パーセント以下。問題ありません。」

ギルトは笑みを浮かべた。

「さあ、来るか？」彼は虚空に囁いた。

真に人を見下す人間は、相手に屈辱を味わわせるのではなく―相手の心を弄ぶ。ギルトも例外ではなかった。素直な少女が、仄かな好意を抱く相手に想像を絶する恩を受け、そして、相手の正体と、どこにいけば相手に会えるのかを知る。そうなった時、彼女はどうかするか。ギルトは向こうが、こちらに会いに来ることを期待していた。彼女が1人で社まで来てくれれば、罪が暴かれるリスクは格段に下がる。今は待つだけだ。

それから更に1週間が経った。ギルトは少し不安になったが、3度目の接触をするとは憚られた。こちらから会ってしまったら、彼女が社に訪ねてくる必要性は無くなってしまう。それ以降でまた大きな貸しを作れば、さすがに向こうも何かおかしいと気付くだらう。今のギルトには待つ以外の選択肢はなかった。妻は、夫が日ごとに考え込むようになるのを見て心配し、部下は停滞するシャロットの開発を訝しんだ。延期した期



日も過ぎて、リポーターは催促の電話を入れてきた。「申し訳ありませんが、前回のインタビューが、ダメ出しされたんですよ。具体的な商品の良さを、もっと調べると言われました。それで3日以内に、どうにか撮り直しをさせて頂けないでしょうか。新商品についての情報がですね、どんなものでもかまわないので、欲しいんですよ。ええ、本当にどんなものでも結構ですので。伝え方はこちらが工夫しますから。例えば、商品自身に喋らせるという形にすれば、斬新ですし興味を引きますよ。社長の半生を振り返ってみて、商品開発までの苦労を強調してもいいです。そうだ、何なら、バラエティー仕立てにしてみますか。笑いを交えつつ小出しにすれば、同じ情報量でも3倍の時間は稼げますよ。」ギルトはため息をついてセルフォンを切った。

そして更に、ギルトは待った。少女と初めて会った日から、一ヶ月が経とうとしていた。

矢のごとく過ぎる時間は、少女にも変化を与えていた。

リリィーはあれから、アロン・ニューテクノロジー社に関する画像を検索し、遂に彼の顔写真を見つけて、間違いなく彼こそがギルト・ロイウエルその人なのだと確信した。そうしてただ思うのは、自分がいかに幸運に恵まれたかということと、彼への感謝

であった。しかし、その想いは日ごとに変わっていった。

あの日から2週間、リリィーの頭に繰り返し浮かぶ映像があった。彼と会って話した、ほんのわずかな時間のキネマである。カメラは終始相手に向いていて、リリィー自身は全く映っていない。いや、これはそもそも、リリィーの眼から見た光景だった。始めはいつも、あのオレンジのメッシュが入ったぼさぼさ頭。服も車も決して高そうではない。しかし、佇んで見送った青いミニ・バンが視界から消え、振り返ると、綺麗な格好をした彼が立っていた。アロン・ニューテクノロジーの若社長。誰もが羨むその人が、今リリィーの目の前にいる。いつの間にか場面は古本屋で、リリィーは彼が探していた本を手持っていた。本を渡すと、彼は笑顔を浮かべた。「ありがとう。他の古本屋では見つからなかったんだ。」リリィーのキネマは彼を映し続けた。珍しい蒼のメッシュがクローズ・アップ。次は顔。パリッとした白黒の上着。靴も隙無く磨かれている。

キネマはいつも、あの日のやりとりを繰り返すだけで終わっていた。リリィーは毎回泣きじゃくり、彼は毎回彼女をなだめてくれた。背中をさすってくれる手の感触も、毎回同じだった。しかしいつからか、リリィーはそんな自分を子供みただと嫌悪するようになった。背中をさする手は薄れていき、やがて消えた。そしてカメラは背伸びをするように、相手の男に寄ったまま、離れなくなつた。映るのはただ、顔。顔。顔。この人は少し鷺鼻気味だけれど、鼻筋から眉にかけてのラインがくっきりしている。唇は薄

い。もちろん髭の剃り痕なんて無い。笑うと、右より左の方が少しだけ長い笑いジワが出来る。あ、今笑った。また笑った。気がつけばカメラは、接触しそうなほどの距離に近づいていた。駄目だ、それ以上寄ったら……。:

唇に甘い感触を覚えて、リリーは眼が覚めた。見回すと、悲しいほどに見慣れた、みすぼらしい物置のような部屋の中だった。リリーは上体を起こして、そっと唇を指でなぞった。

間もなく、朝食の時間になった。人工食料の美味しいスープを飲みながら、リリーの頭はキネマの中だった。「いい名前だ」「また会えて嬉しいよ」「どうしたんだい？」あの人の言葉が、何度も何度も再生される。リリーはおもむろに、温められたスープを唇に当てた。目を閉じれば十分、あの感触を感じられた。リリーは感謝をこめて、スプーンに口付けし、コーンのかけらをそっと掬った。

あの人は、雲の上の存在だった。何でもないと言うように、さらりと私達を救ってくれた。住む世界が違う人。でも、私に笑いかけてくれた。2度目に会ったら、ちゃんと思い出してくれた。会えて嬉しいと言ってくれた。慰めてくれた。スープを一口飲む度に、熱と一緒にじんわりと、ギルトという存在がリリーの心にしみ込んでいった。会いたい。今すぐにも。そう決めたら、居ても立ってもいられなくなった。彼女は

思いを口にするのは苦手だったが、感情に1度火が灯ると、動き出さずにはいられない性質だった。

会いたい。今すぐにも。

会ってお礼がしたい、というのが単なる建前だということには、とうに気づいていた。

シャロットが、アロン・ニューテクノロジーのオフィス・ビルに接近しているリリーを発見したのは、その次の日だった。

「ようやく来たか」モニター越しに彼女を眺め、ギルトは笑みを浮かべた。

「どこで仕掛ける?」

「思考透視の時がよろしいかと」

「いい考えだ」

シャロットと話している間に、リリーはアロン・ニューテクノロジー社のゲート前まで辿り着いた。

「どちら様でしょうか?」シャロットの事務的な声が響いた。

「私はリリーと申します。そちらの社長のギルト・ロイウェル様にお礼をしに伺いました」

ギルトの笑みが深くなった。ここまで思い通りに事が運ぶと、爽快で仕方がなかった。「怪しい者ではありません。どうか、ゲートを開けて下さい」

第1ゲートが開いた。「中へお進み下さい」

少女は心から嬉しそうに、一步を踏み出した。

ギルトは愉快すぎて、逆にリリィを哀れに思った。彼は聞こえるはずもない彼女に話しかけた。君を襲ったその不幸が、誰の企みか知っているか？

第2ゲートの前の部屋の中央には丸いスペースがあり、頭上から注ぐ淡いブルーの光が大理石の床を照らしていた。

「弊社にお越しくださいます。誠にありがとうございます。全ての訪問客の皆様は、こちらでレベル3の思考透視をさせて頂くことになっております。申し訳ありませんが、防犯対策にご協力下さい。」

シャロットの事務的な声が響いた。綺麗な声だとリリィは思った。人工知能についてあまりにも無知だった彼女は、その声の冷たさには全く気付かなかった。彼女は他の無知な多くの人々と同じように、ただ一步引いた所から文明の進歩に感嘆の声を上げるのみだったのだ。その文明が、己と同じ世界にあることを知らずに。

「分かりました」リリィが答えると、シャロットが先を促した。「では、身につけて

いる電子機器類、金属等を外して壁際のケースに入れてください。次に円の中央に立って、身体を真っ直ぐにしてリラックスして下さい」リリィは言われた通りにした。

「思考透視を開始します。強力な電波が流れますので、ご注意ください」

リリィは口を開いたが、彼女が言葉を発する前に、電波が流れた。リリィの身体が引きつって、揺れた。それは明らかに、思考透視のための電波ではなかった。真実に気付く間がリリィにあったのかどうかは定かではないが、そうだとすると彼女には助かる術はなかった。ギルトは哀れな少女の最期を眺めていた。

すると突然、リリィが顔を上げた。

モニターを通して、確実に2人の視線が交差した。

ギルトはぎよっとしたが、眼を逸らすことが出来なかった。それはほんの数秒の出来事だったが、ギルトには永遠のように感じられた。ギルトの眼の中で、彼女が少しだけ微笑んだように見えた。口が動いて、何かを言おうとした。次の瞬間、小柄な身体がカクンと揺れて、糸の切れた人形のように床に落ちた。そして急に、モニターの画面が一面紅く染まった。

それは砂嵐だった。紅い砂嵐は数秒続くと、これも突然ふつりと止んだ。

ギルトが瞬きをすると、もうモニターにはいつもの第2ゲート前が映っていた。ただ

ひとつ違うのは、そこで少女が倒れていることだけだった。痛いほどの鼓動が耳にうるさかった。ギルトは唾を飲み込み、無意識にネクタイを緩めた。

しばらくして、シャロットが言った。「死亡確認しました。すぐに声帯切り取り作業に入ります」

ギルトはすぐには返事が出来なかった。彼はただ、モニターを見つめていた。画面の中では第2ゲートが開き、可動式AI達が入ってきていた。激しい動悸が少しずつ落ち着いていった。

「死んだ……」ギルトは呟いた。何の感慨もなかった。理想の声を手に入れた喜びさえも。

モニターの向こうでリリーの身体が運ばれていった。ギルトは画面を見ていたが、どこにも焦点は合っていなかった。彼の眼にはまだ、己を見つめるリリーの眼が焼き付いていた。

「あの紅い画面は、何が起きた？」

シャロットは答えなかった。聞いたギルト本人も、答えを求めてはいなかった。

さっき、彼女は微笑んで、何を言おうとしていたのだろうか。

全て思い通りにいったはずなのに、先程までの高揚感は全く無かった。むしろ、肚を満たしていたのは吐き気にも似た不快感だった。

## 四 紅

「本日は、いまやAI部門で世界1位の業績を誇る大企業、アロン・ニューテクノロジー株式会社の若社長のギルト様にお会いできました。噂の敏腕若社長はルックスも爽やかですね？」

今朝一番の仕事は特集番組のインタビューだった。応接室でカメラを向けられたギルトは、ため息をつきたくなる気持ちを抑えながら、作り笑顔で返事をした。

「ありがとうございます。」この笑顔も爽やかです！「異様にハイ・テンションなリポーターに、ギルトの眉が引きつった。リポーターは出されたコーヒーには手もつけず、ひたすら話し続けた。

「では本題に移りましょう、みなさんご存知、ここアロン・ニューテクノロジーは、超高度人工知能を世界で始めて開発し、販売した会社なのです！超高度人工知能とは、ざっくり言ってしまえば感情を理解する人工知能、ということですよ、よろしいでしょうか？」

「ええ、大まかにはそれで合っています。あとは、主に言語を用いて人間とやりとりし、サポートするので、感覚質の共有―ある言葉の意味を相手と共有するために必要なことです―や、同じ単語でも文脈によって異なる意味を読み取る、といったことが必要になってきます」

リポーターはうなずいた。「有名な『言語問題』ですね。一時は不可能とまで言われていたこの問題は、四年前ドクター・ハガが解決し、ノーベル物理学賞を受賞しました。その超高度人工知能を応用した商品を初めて開発したのが、ギルト社長なのです。」

ギルトは苦笑した。「私ではありませんよ、うちの研究員達です。」

「ご謙遜を。」リポーターも笑った。和やかな雰囲気を訪れた。笑いが落ち着くと、リポーターは話を再開した。

「―そんな超高度人工知能の技術を用いて、シミュレーション・ゲームから秘書AIまで、幅広い商品開発で世界に貢献しているアロン・ニューテクノロジーですが、本日は取って置きの新商品を見せて頂けるそうです！ギルトさん、新商品とは一体どんなものなのでしょうか？」

ギルトは初めて、本心からの笑みを浮かべた。「残念ながら、家庭用ではありませんよ」

ギルトは何も無い空間に向かって話しかけた。「シャロット、お客様に挨拶を。」すると、女性の声が聞こえてきた。

「始めまして、ドット模様のネクタイが素敵なりポーターさん」

リポーターは驚いて何も言えなかった。部屋全体に響いているのか、耳元で囁かれたのか、判断ができなかった。うっとりとして聞き惚れてしまいそうになるが、オフィスに相應しい堅さがあり、ほどよくセクシーな声。こんな声を、聴いたことがなかった。

「驚かれましたか？」リポーターが何も言えないしていると、耳元でクスリと上品に笑う音がした。ウォール・スピーカーから出たのだと気づけるまで、数秒かかった。

「これは…？」リポーターは思わず、素から感嘆の声を上げた。このなめらかさ。この、一音一音から伝わってくる感情。いや、そんなことじゃない。そんな次元の話じゃない。この声はまるで、春の小枝で歌う小鳥のさえずり、深い藍をたたえた海から響く貝の音色だ。少女の清らかさを持ちながら、同時に深い母性に優しく包まれたような感覚になる。これはAIなのか。こんなAIは自分は知らない。

「声は、特にリアルさを追求しました。どこの誰を元にした、とは言えませんがね。私も初めて聴いた時は、今世紀最高の幸せに恵まれたと思いましたよ。気に入って頂けましたか？」

ギルトが満足そうに言った。

リポーターは唾を飲んだ。気に入る、なんてものではない。到底自分の稼ぎでは買えないだろうが、それでももし万が一の届きそうな所にあるならば、借金をしてでも…



と、一瞬考えてしまうほどの、声だった。

「秘書AI、ですか？」

「いえ。オフィス・ビルの、総合管理AIです」  
ギルトはゆったりと微笑んだ。

「従来の秘書AIの仕事に加え、室温管理から防犯まで、ビル全体のスケールで所有者をサポートします。価格は未定ですが、2億くらいになるかと思われます」

「ビル全体ですか。とても、斬新な発想ですね」リポーターはまだ声に心を奪われていた。

「斬新ではありませんよ。建物をトータル・マネジメントする機械という発想は、21世紀初期からありました。強いて言うならば、それを超高度人工知能技術と結び付けたところが、この商品のユニークネスでしょうね。」「なるほど。どちらにしても、素晴らしい発想です」リポーターはビルのことにはまるで興味がないうだった。

「ところで、先ほどの声は、AIとはとても思えなかったのですが……」

ギルトは軽く笑った。「もちろん、正真正銘、AIですよ。今回は特に、特殊な技術を使って、限界まで生身の人間に近づけました。いえ、もう人間そのものと言ってもよろしいかと思います。人間と同等以上のレベルの接客ができるAI、というものを目指したんです。従来の秘書AIでは、いくら美しくてもずっと固まった笑顔で棒読みでした。」

たので。」

リポーターの隣で、AIが囁いた。「人間と間違えて下さって、光栄ですわ、リポーターさん」花のような笑顔が浮かぶ声だった。

「私も嬉しいよ、シャロット」ギルトはコーヒを一口飲んだ。リポーターははっとした。

「その、シャロットというのは新商品の名前ですか？」

「ええ。これまではずっと女神や聖人だったので、今回は物語から採りました。塔の中にいて外に出られないのですが、鏡を通じて世界の全てを見ているという姫の名前です。このAI自体は我々に触れることは出来ないけれど、ビルの全てを把握している、という点で彼女と大変似ていると思えます」

「シャロット、いいですね。異国情緒があって、素敵な響きです」リポーターは夢見心地で頷いた。

シャロットがギルトだけに聞こえるように囁いた。「社長、そろそろお時間ですよ」

ギルトはリポーターに頭を下げた。「失礼ですが、話の続きは次回にしてもらってもよろしいでしょうか？会議がありますので」

リポーターはこちらも、頭を下げた。「いえ、大変貴重なお話をありがとうございます。ごさいました。」

リポーターは手帳を取り出した。「では次回は、22日の18時からでよろしいでしょうか？」ギルトは頷いた。「ええ、お待ちしております」

では、ともう一度軽く頭を下げ、ギルトは記者と共に応接室を出た。彼はそのまま、廊下を歩いて行った。残されたリポーターの頭上で声が響いた。「お客様用出入り口までご案内いたしますわ」

リポーターは喜んで指示に従った。

1日が過ぎるのは早い。ギルトは仕事を終え、家路についた。

帰ると、妻が出迎えてくれた。ゆったりとした白い部屋着に、コーラル・ピンクのスカートを履き、長い髪を赤いバレッタで留めていた。黄色いピアスはマリー・ゴールドのようだった。気の強そうな切れ長の瞳、高い鼻、左目の下にある泣きボクロ、彼女の整った顔の全てのパーツの中でも、ギルトは特に唇を一番気に入っていた。彼女の唇は露に濡れたバラの花びらで、その味はまるでケーキを彩る甘酸っぱいベリーだった。

ギルトはタイを緩め、テーパーについた。

「あなた、今度の週末は暇かしら？」夕食を食べながら妻が尋ねた。ピンクの爪がコップの持ち手に絡んで、優雅にそれを持ち上げた。

「久しぶりに、食事に行かない？私は今週は空いているから」最近、妻は自分から誘うことが多くなった。

しかしギルトはあいにく、最近更に忙しくなったところだった。「声」が手に入ってようやくシャロットの商品化が再開され、今まさに必死で遅れを取り戻そうとしている最中なのだ。「すまないが、今週末は忙しいんだ。新しいAIの商品化に向けて、最後の調整が必要だね」

「それって、『シャロット』？」妻の言葉が微かに鋭くなった。

ギルトは苦笑した。「おいおい、あれはAIだぞ。そう厳しくなるなよ。」

「でもあのAI、まるで人間みたいな声をしているわ」

「そりゃあ、万人に好かれるよう、声は厳選したからね」

「私は好きじゃないけど。」

妻はギルトから視線を逸らした。彼女は思案気に眉をひそめた。バラの花びらが一度閉じて、開いた。「声だけじゃないわ。あのAI、何だか気味が悪いの。口調も何もかも、本物の人間みたい……」

「ジーナ」ギルトは妻の名を呼んだ。「あれは極力リアルに近づけただけで、人間じゃない。それは、開発に携わった私が一番分かっている。心配しなくても、あのAIに特別な感情を抱いたりなんかしないさ。そして向こうも、もちろん、そんなことを考える

ようなプログラムは組み込んでいない。」

突然、ザザッと音がした。2人はスプーンを持つ手を止めた。どうやら、ウォール・スピーカーにノイズが入ったらしい。妻は視線を寄越して「私はAIの面倒は見ないわよ」と言ってきたので、ギルトは席を立った。ギルトが壁をこぶしで軽く叩くと、ノイズはすぐに収まった。

ギルトが席に戻ると、ジーナは無言で食べ始めていた。いつもなら待っていてくれる思慮深い妻は、こういう態度で自分の機嫌を示す。ギルトは心の中でため息をついた。しかし、彼は妻の扱いは心得ていたし、洗練されている彼女がたまに見せる、こうした子供じみた嫉妬を、可愛らしいとさえ思っていた。

ギルトは彼女を抱きしめて、囁いた。

「例え人間相手だとしても、君に適う人はいないよ」

ジーナの花は、漸くほころんでくれた。

「どうかしら？」「100パーセント保証するよ。」

2人でクスクスと笑った。

夜中、僅かな明かりが灯る寢床の中でジーナはギルトの手に指を絡めた。

「さっきはごめんなさい、私、疲れていたのだと思うわ。」

「きっとそうだ。ゆっくり寝るといい。たまには仕事を休んで、O2スパにでも行ってみたらどうだい？」

ジーナは考え事をしているようだった。

「あなたは、ないの？」

ギルトは虚をつかれて、変な声を上げた。「何が？」

「不安に潰されそうになることよ。」

ギルトは笑った。「何を心配することがある？2人ともビジネスは順調、君は若く美しく、そして将来の蓄えもある。幸せ過ぎるくらいさ」

「幸せ。そうね、幸せね。」バラの花びらがその言葉の形に動いた。

「だから、恐いの。」

暗がりの中で、ジーナは囁いた。

「私は今、とても幸せよ。でも、何だか、これは長い夢で、スイッチを切ったら消えてしまう気がするの」

「ジーナ、」

「それに最近、思い出すのよ。ジャスティンのことを。私達の幸せは、罪の上に成り立っ



ている。いつか必ず、償いが必要な時が来ると思うの。私達は、罪に追われているのよ。いつか必ず、追いつかれてしまう。シャロットが、あのAIが、その引き金になりそうな気がして、」

「ジーナ。そこまでだ。」ギルトは彼女の肩を片腕で抱いた。

「混乱しているみたいだ。少し落ち着いた方がいい。いいかい、あの事故を僕らの罪と言うなら、不幸にも身近な人を死なせた人間は全て罪人ということになるよ。残された者には不幸になる義務はないし、君があればいつまでも背負い込む必要もない。それに、今ここに君がいて、僕がいる、それは事実だ。夢なわけがないさ」優しく背中を撫でながら言う。彼女は小さく笑った。

「ごめんなさい。さっきも謝ったのに、また同じようなことを言ってしまったわ。」

「心というのは理性で制御できないものさ。意識して忘れようと思いつけると、かえってそればかりが頭を巡るようになるんだ」ギルトはジーナに微笑みかけた。

「だから、もっと楽しいことを考えよう。おやすみ。」

ジーナも彼に微笑んだ。バラの花びらが、おやすみ、と言った。

2人の顔が近づいた。どちらからでもなく、ただお互いの唇を目指して。

そしてそれが、そっと触れ合おうとした。

その瞬間。

激しい警報音が鳴り響き、2人は反射的に身体を離れた。急に部屋の照明が点いて、2人の姿を白昼の元に曝け出した。目もくらむばかりの光に、ギルトは目蓋の血が沸騰したような錯覚を覚えた。紅く染まった視界に割れるようなサイレンが響く。ギルトは声を上げた。

「シャロットか？誤作動だ、今すぐ止める！」

返事は無い。警報機の音はうるさくなるばかりだった。ギルトは舌打ちをして部屋を出た。

リビングにある65インチのネットワーク・テレビは、この家で唯一シャロットのコア・システムにアクセスできる機器だった。ギルトがドアを開けると、警報音はいっそう大きくなり、リビングのシャンデリアはイルミネーションのように点滅した。窓が開き、カーテンが風にたなびく。ギルトはリモート・コントローラを取り、荒々しくテレビのスイッチを入れた。

点いた画面は紅かった。

炎のような紅の砂嵐が、65インチの面積を埋め尽くしていた。画面の外にしているのはこちら側のはずなのに、内側から見つめられているような気がした。ギルトがボタンを押しても、何を言っても反応は無く、ただ画面の中では砂嵐が吹き荒れていた。ギルトは悪態について、机を叩いた。何も変わらなかった。壊れた機械を目の前にして、人間

は無力だった。

諦めた手がリモコンを机に置いた途端、砂嵐は消え去った。

シャンデリアの灯りがふっと消え、サイレンが鳴り止んだ。耳鳴りの残る頭で見渡せば、何もかも元通りのリビングだった。唯一、電源が切れて閉まらなくなった窓から、夜風が吹き込んでカーテンを膨らませていた。

## 五 シナプスの幻

夜の一件の次の日、ギルトはすぐにシャロットの検査をした。オフィス・ビル以外には、非常時の為に自宅の一部のウォール・スピーカーとネットワーク・テレビとのみリンクしていたはずのシャロットが、何故暴走し、我が家の家電ネットワークの一部をジャックしたのか。ギルトは何としても解明したかったのだが、結果、異常は見られなかった。シャロットは至って普通に仕事をこなし、今まで通りにギルトと会話した。

そうして1週間後、シャロットは予定通り市場に売り出された。特集番組の宣伝効果もあって、各国の一流企業がこぞって彼女を買い付けた。中には何人か、個人で所有するというセレブもいた。とにかく、たちまちのうちにシャロットはアロン・ニューテクノロジーの看板商品となったのだ。

次の休日も、ギルトは一風変わった趣味に出かけた。

キャップの下の髪はいかにも手入れが行き届いてなさそうな、安っぽいグリーンノメッシュが3本。ルーズなジャケットの背中では、拳銃を自分の頭に押し当てた子供が生え揃いの悪い前歯を見せて笑っていた。中流階級にびつたり青いミニ・バンでダウン・タウンをドライブし、イタリア料理屋に入ると、店内は程よく空いていた。ターゲットはカウンタースでピッツァ・マルゲリータを食べている男。ギルトはキャップを取り、歩み寄った。「隣、空いていますか？」男は無言で頷いた。

最初は、当たり障りない景気の話。相手に拒絶する様子が見られなかったので、続けて、でっちあげた自分の事情を話す。そこで男に話を振ると、彼は狙い通りに話し始めた。

「俺の息子が、特異体質でさ。自然食料しか受け付けねえんだ。でもこのご時勢、普通の店じゃ人工食料しか売ってねえ。安くて上手い、しかも安全だからってみんなして人工食料を買うだろ、そしたらますます自然食料を作るやつらがいなくなって、自然食料の値は上がるのさ。」

男はピッツァを1枚取って、豪快に噛り付いた。チーズが垂れて顎についた。「福祉型都市が聞いて呆れるぜ。結局世の中、需要と供給なんだ。その他大勢と具合が違うってやつのは、誰も考えちゃくれないのさ」男はチーズをつまんで、舐め取った。「お

陰で息子は、毎日似たようなもんばっか食ってるよ。あいつが病院で検査を受けてる間、俺はいつもここで昼飯を食うことにしているんだ。いつも同じマルゲリータでな。少しは、あいつの退屈が分かったようなつもりになっているのさ。」

「同じものしか食べられない退屈ですか。僕には想像も出来ませんが、恐ろしいですね。」ギルトは相槌を打った。

「俺達だって似たようなもんさ」男はギルトを見た。

「あなた、毎日がおんなじことの繰り返しだと思って思ったことはねえかい？」

ギルトは目を瞬かせた。男の顔が、前にカフェ・ラウンジで話した別の男の顔に見えたのだ。男は水を飲み干した。

「俺ア思うんだよ。この街の市長が人工知能になってから、いや、もっと前かもしれない。とにかく、機械が人間にしか出来ないことをやるようになって、俺達人間は逆に機械に成り下がっちゃったんだ。俺達が歯車で、やつらが脳なんだってな。」

背後から忘れようもない声をして、ギルトは硬直した。

後ろを振り向くと、すぐ近くの四人掛けのテーブル席に、少女が座っていた。服装は流行遅れの白いダウン。紅のショート・ヘアはあちこちに跳ねて、紅葉が頭から生えているようだった。

ギルトは呪いにかかったように、少女から目を離せなかった。少女はメニューを閉じて、テーブルに置いた。そして、まっすぐこちらを見た。

少女の唇が動いた。「私、お礼を言いに来ました。」

ギルトは射抜かれたように、動けなかった。

少女がゆっくりと立ち上がって、近づいてきた。いつの間にか、店はカフェ・ラウンジになっていた。少女のテーブルの上にはメニューの代わりに、食べ終わったマフィンのプレートが置かれている。ペンキの剥げかけた朱色の窓枠から、薄暗い店内に眩しいほどの光が差し込んでいた。オレンジの髪にアナーキストのTシャツを着たギルトは、動けないまま呆然と少女を見つめていた。

少女が、す、と手を伸ばした。白い手が間近に迫り、首に触れるかと思った時、ギルトは思わず身を強張らせた。しかし手は上に逸れ、ギルトの頬に添えられた。彼は不審の眼で少女を見た。少女は微笑み、細い指で男の頬を撫でた。いたいけな少女のそれは違う、愛撫の意味を知っている女の手だった。

それは妻であり、母であった。ギルトは安らかな心地よさに包まれ、眼を閉じた。ふわりと薫る花の匂いは、バラかユリか定かではなかった。

気がつけばそこは自宅のベッドの上で、ギルトは仰向けになって眠っていた。繰り返して、繰り返して、見る夢があった。彼はそれが夢であることを知っていた。

それはキネマだった。少女と話した、ほんのわずかな時間の映像だった。最初、カメラは少女に向いていたが、次第にギルト自身を映し始めた。珍しい蒼いメッシュがクロール・アップ。次は顔。パリッとした白黒の上着。靴も隙無く磨かれている。そしていつからか、カメラはギルトの顔に寄ったまま、離れなくなった。映るのはただ、顔。顔。顔。いつの間にか、ギルトというのは相手の男の名前になっていた。キネマを見る彼は、ひと時の出会いに仄かな想いを寄せる少女だった。男が笑顔を浮かべる度に、己の心の中に幸せの火が灯った。あ、今笑った。また笑った。気がつけばカメラは、接触しそうなほどの距離に近づいていた。胸の内は甘酸っぱい期待に高鳴っていたが、その名前を口にするのは暗黙のうちに禁じられているのを、己は知っていた。だから自分は、それから目を逸らそうとする素振りさえ見せた。駄目だ、それ以上寄ったら……。

ギルトは眼を醒ました。

暗がりの中だった。やがて彼は、自分は車に乗っていて、ここは自宅の駐車場の中だと気づいた。汗が額を伝っていた。

「大丈夫ですか？」内耳に響いた声に驚いて、ギルトはイヤフォンの存在を思い出した。しばらくして、彼はゆっくりと、イヤフォンを片耳だけ外した。

「シナプス・レゾナンスのスイッチが勝手に入ったのか？」ギルトは問うた。  
「原因不明ですわ。申し訳ございません」シャロットが詫びた。白昼夢に出てきた少女と、同じ声だった。

ギルトはそれ以上喋らなかつた。先程までの光景が目蓋の裏に蘇っていた。あの映像は、恐らくリリーの頭の中のものだ。キネマを観ている最中に覚えた愛しい感情は、忘れたいものだった。あの瞬間、彼はまさに、リリーになっていたので。ギルトは背筋が冷えるのを感じた。五感に支えられた確信、今ここに自分が居るのだという真実が、テレビのスイッチを切るようにプツリと途切れていた。眼に映るものはシャロットの世界で、耳に入るのはシャロットの声だった。その愛らしい、魅力溢れる声は、自分が殺した少女の声でもあった。

ギルトは極力このAIを使わないようにしたが、彼女を廃棄することはできなかった。「シャロット」は今や世界中の大企業の憧れだ。そのシャロットを開発した会社が、使用を中止することなど、許されるはずもない。世界は確実に、彼の望んだ方向へと動いていたが、彼一人の力では止められないほどに加速していた。

## 六 崩壊

「もしもし、ギルトさん？お久しぶりです。私、いつもインタビューさせて頂いているロイテと申します」

「シャロットの人気は大変素晴らしいですね！さすがです。特番を組ませて頂いた方としても嬉しいです」

「ところで先日、耳にしたのですが、」

『『ジャスティン』という名前に聞き覚えはありますか？』

この頃、妻は今まで以上に不安を訴えるようになった。ギルトとしても、警戒は解けない状況だった。幻覚症状や意識を失うことはあれから1度も起きていない。しかし彼はもう、シャロットを信じられなくなっていた。99・9998パーセントの防御を奇

跡的にすり抜けた最新型のウイルスにやられたのか、悪意の第三者にハッキングされたのかは分からない。どちらにせよ、シャロットは明らかに異常だった。

ギルトは今日も仕事を終え、家路についた。

帰ると、妻が出迎えてくれた。ゆったりとした黒い部屋着に、ベージュのスカートを履き、長い髪を茶色のバレッタで留めていた。白のピアスはパールのようだった。気の強そうな切れ長の瞳、高い鼻、左目の下にある泣きボクロ、彼女の整った顔の全てのパーツの中でも、ギルトは特に唇を一番気に入っていた。彼女の唇は露に濡れたバラの花びらで、その味はまるでケーキを彩る甘酸っぱいベリーだった。

ギルトはタイを緩め、テンプルについた。

「あなた、今度の週末は暇かしら？」夕食を食べながら妻が尋ねた。銀の爪がコップの持ち手に絡んで、優雅にそれを持ち上げた。

「今週こそ、どこかに出かけましょうよ。どこか…シャロットのいないところに。」

「そうだな」ギルトは頷いた。

「久々に、街の外に出よう。どこに行きたい？」

ジーナは安心したように笑った。「コスミック・パークへ行きたいわ。私達が初めて会った場所だから」

「そうしよう」ギルトはステーキをほお張った。「懐かしいな。そうだ、そこで会ったんだって」

沈黙が訪れた。夫婦の脳裏には同じ人間が浮かんでいて、2人とも互いにそのことに気付いていた。しかし、だからこそ、2人は、口にするのを躊躇っていた。

「よくあそこで星を見たわね。3人で」一歩を踏み出したのはジーナだった。

真夏のコスミック・パーク。頭上に浮かぶ満点の星空を眺めたのは、一組のカップルとその親友。

「今でも、彼が恋しくなるのかい？」残酷な問いと知りながら、ギルトは問わずにいらなかった。ジーナは小さく首を振った。

「いいえ。後悔することや、申し訳なく思うことは何度もあったけれど。私が、あなたを選んだのだから」ジーナは微笑んだ。

「自分が一番分かっているわ、悪いのは私だって。でも、どうしようもなかったのよ。それまでの私は、本気で人を好きになるということを知らなかった。そして、それを知った時には、もう遅かったのよ。でも我儂な私は、自分の幸せを追うことにしたの。そして…」

「ジーナ」ギルトは妻の名を呼んだ。「あれは事故だ。君は何もしていない」

「そう」ジーナは言った。「これまででは、そう思っていたわ。助けられなかったのは不



幸だったけれど、仕方ないって考えるようにしていた。でも、違ったの」ジーナはギルトを見た。「それは、本当の記憶ではなかった。」

ギルトはゆっくりと言った。「どういう意味だい？」

ジーナは身を乗り出した。「全部思い出したの。私達はあの時、恐ろしく合理的で自分の幸せに直結している道に気付いてしまった。そして、それを実行したけれど、今度は恐ろしさに耐えられなくなった。だからあなたは、塗り替えることにしたのよ。全ての記録と、全ての記憶を。その時あなたは言っていたわ、全ての人と機械が認知するなら、それは事実になるって。そしてそのまま、本当に誰にも気付かれずに、ここまでできてしまったの。嘘が事実になったのよ。」

ギルトは額に指先を当てた。自分が幼馴染の元同僚を殺した？馬鹿馬鹿しい。

しかし、その言葉は妙にじっくりときた。ギルトは己の両手を見つめ、ふと気がついた。そうだ。この手で首を絞めたのだ。指先には微かに、柔らかい首を掴んだ感触が残っていた。

だが彼は更に考え、違うと思いついた。いや、銃で撃ち殺したのだ。指に残る感覚は、硬い引金を引いた重い手ごたえであった。カチリという金属の音。コンマ一秒後の破裂音。飛び散る紅。違う、違う。私は直接手を下したりしなかった。彼に贈ったAIが、暴走して家火をつけるよう仕向けたはずだ。待てよ、リリーの時のように、思考透

視を装って脳を破壊したのかもしれない。いや違う。落ち着け。私は確か、病にかかった彼に毒を飲ませたはずだ。

次々と浮かび上がる記憶はどれもリアルで、互いに矛盾するはずのそれらは全て真実に思われた。鈍い頭痛がして、ギルトはこめかみを押さえた。

「ジーナ」混乱する思考の中で、ただ一つ、確かなことがあった。

「僕は、ジャスティンを殺したのか」

ジーナは頷いた。ギルトは息をついた。眼を閉じて髪を掻き上げ、動揺を隠そうとする。優しい口調になるよう努め、彼は言った。「どうして急に、自分の記憶を疑ったんだい？」

「シャロットが、」ジーナは呟いた。「そう言ったの。」

「シャロット？」

目が醒めるようなセルフフォンの音に、ギルトははっとした。彼は恐る恐る受話器を取った。耳に入ったのは場違いなほどにこやかな声だった。

「もしもし、ギルトさん？お久しぶりです。私、いつもインタビューさせて頂いているロイテと申します」

相手はいつものリポーターだった。彼はまた、いつものようにぺらぺらと喋り始めた

ので、ギルトは適当に相槌を打って電話を切ろうとする。

相手の声の調子が突然変わった。

「ところで先日、耳にしたのですが、『ジャスティン』という名前に聞き覚えはありますか？」

ギルトは一瞬、思考が停止した。

「……いやね、警察の方が、何か知らないかって聞いてきたもんですから。行方不明にでもなったのでしょうか」

反射的に会話を終わらせていた。ブツリという音の後は、頭の中は砂嵐だった。

電話が再び鳴った。ギルトは一瞬固まって、それから落ち着いて受話器を取った。

「ジャスティンさん、というのはギルトさんが初めて殺した人間ということでしょうか？」

ギルトは瞬間的に電話を切った。

すると、電話はまた鳴り始め、ネットワーク・テレビからも、セルフォンからも、電話の音が漏れ始めた。

ギルトが部屋を見回していると、ウォール・スピーカーから声が流れた。

「やあギルト、僕の彼女を大切にしてくれているかい？」

「君には僕は殺せない。君が死なないのと同じようにね。」

「僕が始めた開発に君が加わって、君が全てを乗っ取った。でも復讐するつもりはないよ、君を裁く者は君の中にいる。」

ギルトは耳を覆い、止めると叫んだ。それは間違いなくジャスティンの口調だった。ただ、その声は、彼女の声だった。

ギルトは幻聴を振り払おうとして、ジーナの元へ戻った。俯いて悲嘆に暮れている彼女を揺する。顔を上げた妻を見て、ギルトは言葉を失った。泣き腫らした眼でこちらを見つめているのは少女だった。紅のショート・ヘアがあちこちに跳ねて、愛憎の炎が頭の上で踊っているようだった。

少女は笑顔を浮かべると、心底楽しそうに、声を上げて笑った。いつかの時のようにシャンデリアが点滅し始めた。家中のセルフフォンが一斉に鳴り響き、ネットワーク・テレビは紅い砂嵐を映した。床は熱いほどに温められ、空調は冷たい風を吐き出していた。後ろでレンジの鳴る音がした。掃除機が踊り、電気マッサージ機が震えて床に落ちた。頬に冷たい粒を感じて見ると、開け放たれた窓から雨が吹き込んでいた。部屋の中に、燃えるような紅い髪の少女が立っていた。彼女はもう笑ってはいなかった。ただ、紅い瞳がこちらを真っ直ぐに見つめていた。少女が口を開くと、家中のウォール・スピーカーから、あるいは脳の内側から、ギルトが長年追い求めた理想の声が響いた。

それは、歌だった。シャロットの声を決める時、最初にサンプルとして用いた歌手の



歌だった。ギルトはネットワーク・テレビ本体へ向かい、強制終了スイッチを押した。強制終了したらシャロットのデータが破壊されるかもしれないことや、諸々のことが頭をよぎったが、ギルトにはもうどうでも良かった。しかし、少女は消えなかった。少女はまた口を開いた。次に聞こえたのも、別の歌手の歌だった。ギルトは何度もスイッチを押した。やはり、何も起こらなかった。少女はまた別の歌を歌った。メロディは渦とあって、少女とギルトを包んだ。巻き起こった熱風にギルトは眼を細めた。渦はやがて燃え盛る炎になった。シャンデリアが割れ、破片が飛び散った。欠片の1つが手の甲をかすめ、傷が出来ると、紅い裂け目からも炎が飛び出した。炎の渦に吞まれながらも、少女は歌を止めなかった。シャロットに思考透視されたことのある全ての人間の思いを糧に、メロディは回り続けた。

ギルトは不思議と熱さを感じなかった。それよりも、情報量が多すぎて脳が焼き切れそうだった。それはまるで地獄の責め苦のように延々と続いた。怒涛のような感情を受けて気が狂うかと思った時、ギルトの眼中にあるビジョンが瞬いた。そのビジョンは閃光のようにギルトの脳に焼き付き、二度と離れなかった。ギルトは唐突に、シャロットが何なのか、自分がどうなるのかを理解した。

突然、歌が止んだ。燃え盛っていた炎は消え、真っ白な灰が降り積もった。先程まで燃えていたカーテンもテーブルも、白い灰になってさらさらと崩れた。白い世界に、少

女とギルトは立ち尽くしていた。少女は何かを言おうとしていた。しかし彼女は、その感情を表現する術を持たなかった。

「ありがとうございます」

少女は、それとよく似た、けれど別の言葉を口にした。紅葉色の髪が揺れ、瞳はただギルトを見つめていた。ギルトは彼女を、彼女の心を美しいと思った。綺麗だ、とギルトは口にした。すると少女が眼を見開いた。白い灰が舞い上がり、小さなつむじ風が起きた。やがて灰が視界を覆った。いつの間にか灰は膝ほどの高さまで積もっており、足をとられてギルトは動けなかった。彼は純白の砂嵐の中で、辛うじて、少女が窓の方へ行くのを僅かに捉えることが出来た。左手が硬い物に触れて、ネットワーク・テレビが灰にならずに残っていたことに気付いた。ギルトは一瞬躊躇い、すぐに強制終了スイッチを押した。

## 七 あるシテイの日常

今日の出来事のどこまでが現実で、どこからがシナプス・レゾナンスの産物なのかは分からない。ただそれが、超高度人工知能に特有の感情の暴走、つまりシャロットの中で生き続けたリリィと、彼女の影響を受けたシャロット自身によるものだという事まで、ギルトは理解していた。それは恐らく、最も穢れの無い恋心であった。唯一つの大きな不幸は、当事者の誰もがその正体に気付かなかったということだった。その荒々しい紅炎のような想いに。

間もなく警察が来るだろう。いや、来ないかもしれない。妻はどこにいったのだろう。ベランダから飛び降りたか、あるいは、ベッドルームで寝ているのかもしれない。あの子は、自分とジーナを忌まわしき鎖で繋ぎ留めるきっかけとなった男は、自分は、生きていくのか、死んでいるのか。

全てはどうでも良かった。

ただ一つ言えることは、自分以外の誰もが、シャロットが何なのかに気付いていない

ということだった。シャロットは売れ続けていた。街の大半のシステムは、彼女達の管理下にあった。人々はこれからも、シャロットを使い続けていくのだろう。彼女達を「モノ」だと信じて疑わぬまま。ギルトは笑った。とんでもない。それは「彼女」なのだ。紛れもなく。

ギルトは燃え盛る炎の中で見たビジョンを思い出した。人々が忙しく、毎日同じ道を同じ時間に行き交っていた。彼らの頭からコードのようなものが伸びていて、それはお互い繋がりあったり、一本のままだったりした。ただ、そのどれもが伸びた先では一つのものに繋がっていた。それは脳だった。ドクドクと脈打つそれに通っているのは血ではなく電流だったが、その脳には確かに人と同じパトスが宿っていた。人ではないが、全ての人を内包する存在。それに繋がれた人はまるで、一つの細胞だった。街を見る視点が引いていった。見えた街の全体像はマザー・ボードだった。

今やゼロワン・シテイは、「彼女達」の街だった。人間は歯車で、彼女達が脳だった。恐らく、全ての人間が一度はシャロットの思考透視を受けているだろう。一度でも彼女と思考が混ざり合った者達は、彼らの一部はシャロットの中で生き、シャロットの一部が彼らの中で生きることになる。全ての人間の頭の中に、あの声が響いているのだ。あの、おとぎ話の姫君の声。

きつともうすぐ、ギルト自身も個人ではいられなくなるだろう。響いてくる。彼女の

歌声と一緒に、一步一步迫る罪の足音が。それは背後でピタリと止まった。ギルトは振り返った。自分がそこにいた。

ハイ・ウェイの空気は冷たく、そしてこの上なく清潔だ。男はバルコニーから、どこまでも続く平行線のような道を眺めていた。空が白み始める時間帯だった。男はいつも夜明け前に起きて、この光景を眺める。この街と共に変化してきた風景だ、自分が育てた街の。男は満足げな笑みを浮かべた。

6時7分。警報音が小さく鳴った。窓を開けすぎているのだろう、空調が作動する音がした。男はため息をつく、部屋に入った。彼の背後で窓がゆっくりとスライドし、音も無く閉まった。男は服を着替えた。好みのサイコ・ウェーブ柄のYシャツに、流行っているビビッド・カラーのジャケットを羽織る。清潔感のあるダーク・ブルーのメッシュが5本入った黒髪を、クリスタル・スプレーでさっと固めた。

6時12分。男はタブレットを取り出した。写真を整理しようと思いフォルダを開くと、見知らぬ女性が写っていた。唇が印象的な美人だった。

6時15分。温かいコーヒーがカップに注がれた。ミルクが紅葉の模様を描いてい

た。そういえば、リリーはあれからどうしたのだろう。元気でやっているだろうか。男は微笑み、コーヒーを一口啜った。

6時30分。男はタブレットを鞆にしまうと、立ち上がった。さあ、仕事だ。

「おはようございます」シナプスの内側に、美しい声が響いた。

了

アーサー王研究会創作文庫

エコー

著者 大沢 響

2012年 1月 6日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2011 OSAWA, HIBIKI Printed in Japan

非売品







